



みのる法律事務所便り  
第 3 0 6 号  
平成 2 7 年 1 0 月

みのる法律事務所  
弁護士 千田 實  
〒 021-0853



岩手県一関市字相去 57 番地 5

TEL : 0191-23-8960

FAX : 0191-23-8950



みのる法律事務所 <http://www.minoru-law.com/> [✉ minoru@minoru-law.com](mailto:minoru@minoru-law.com)

## 「戦争と欲望」



現在、『田舎弁護士の大衆法律学 新・憲法の心 戦争の放棄』シリーズを書いています。同時に、『長生きを楽しむコツ』シリーズを書いています。並行して書いているうちに、「戦争放棄」と「欲望のコントロール」とは底流において共通点があることに気がつきました。今回の事務所便りでそのことを紹介してみたいと思います。

後に紹介する文章は、『長生きを楽しむコツ その十 -総論2「欲望」-』の一部です。まだ発刊はしていませんが、原稿はできています。それをこの事務所便りに転載し、一足先に事務所便りをお読み下さっている皆様に紹介させていただきます。

先進国の政治家のトップが集まって、「サミット」（主要国首脳会議）と呼ばれる頂上会議が時々行われていますが、その席上で「戦争はどうして発生するのか」というテーマについて徹底的に議論してほしいのです。「どうしたら自国民や同盟国の国民が贅沢<sup>ぜいたく</sup>できるか」を議論するより、「戦争の原因は何か」、「どうしたらその原因を取り除<sup>のぞ</sup>けるか」を議論してほしいのです。

人間の行動は、「欲望」、つまり「不足を感じて、これを満足させようと望む心」によって動かされています。戦争の原因は、この「欲望」にある気がするのです。戦争を回避するためには、「欲望」について掘り下げ、「欲望」に対する正しい知見の下に「欲望のコントロール」が必要となるのです。

お釈迦<sup>しゃか</sup>様は、2500年前にすでにそのことを見通し、「少欲知足<sup>しょうよくちそく</sup>」を説いています。2500年経っても、人間はその点において進歩していません。その結果、欲<sup>か</sup>に駆られて進歩した自然科学は原爆をつくり、広島・長崎に投下するという恐ろしい

黄色い本、青い本、さくら色の本、ピンクの本等、「いなべんの本」は株式会社エムジェエムの他、下記書店でも好評発売中です。

宮脇書店気仙沼本郷店 〒988-0042 気仙沼市本郷 7-8 TEL: 0226-21-4800  
[amazon.co.jp](http://www.amazon.co.jp/) <http://www.amazon.co.jp/> - 1 -

行為に及んでいます。そのようなことを再び繰り返さないためには、2500年前に戻って欲の本体について掘り下げ、これをコントロールする術<sup>すべ</sup>を確立しなければなりません。

そのような思いで、『長生きを楽しむコツ その十』で、『欲望』について述べることにしました。次の文章は「戦争と欲望」に関する部分です。お目を通していただければ幸甚です。

\*\*\*\*\*

## ○ 衝突する欲望



自分の欲望と他人の欲望とが関わり合うことは少なくありません。双方の欲望が衝突する場面が発生することがあります。これが厄介<sup>やっかい</sup>な問題を生み出すのです。他人との関係のみならず、自分自身の中でさえ、ある欲望と他の欲望が絶えず衝突します。これもまた厄介な問題です。ここはどうしたらいいのでしょうか。それを見極めたいのです。

多種多様な欲望があることを認識し、それを分析し、掘り下げ、どのようにコントロールするかということが、「長生きを楽しむコツ」を見つけ出す上では肝要だと思えます。「人生は楽しみ合うのみ」という『いなべんフィロソフィー』（田舎弁護士の哲学）を実現するためには、不可欠な要素だと確信しています。「衝突する欲望」によって事が大きくなるようにするためには、欲望を掘り下げ、その知見の下に欲望をコントロールしなければならないのです。

ライオンが仕留めた獲物<sup>えもの</sup>をハイエナやハゲタカが虎視眈々と狙っている様子や、これらの動物が命を懸けて争っている姿はテレビでよく観ます。その根源は食欲であり、生命欲です。その欲望の衝突です。

この衝突は、異種動物間に限らず、同じ種類の動物間でも頻繁<sup>ひんばん</sup>に発生します。動物間の欲望の衝突は、動物的欲望の衝突となるのは文字通りであり、当たり前です。

ですが、この動物的欲望の衝突は人間にも見られます。動物の場合は、強い動物が勝ち、弱い動物が負けます。弱いものが食われ、強いものが食うという



「弱肉強食」です。弱いものは肉として食べられ、強いものは弱いものを食べ、食欲を満たすのです。まさに「食うか食われるか」です。

動物間の衝突は単純明快でわかりやすく、「弱肉強食」となります。強い方が腹を満たせば決着がつくのです。弱い方は死ぬだけです。ですが、弱い方は「数で生き残る」などという方法で種を守ったりしています。これが自然の摂理です。

人間界でも、力づくで相手方から奪い取るケースがあります。強盗とか山賊とか海賊などがいます。黒澤明監督（1910-1998）、三船敏郎氏（1920-1997）主演の『七人の侍』（1954年公開、1954年度ヴェネツィア国際映画祭銀獅子賞受賞）は、そのシーンの連続でした。このレベルですと、動物間の争いに近いレベルです。

ですが、人間界ではそのレベルに止まらず、戦争にまで発展することがあります。ここが大問題です。自然の摂理を超えた争いです。

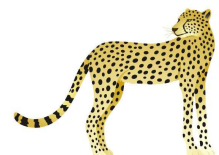
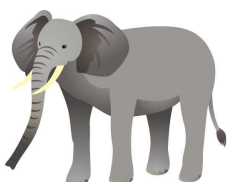
動物間の食欲の衝突では、武器は使われません。国はないのですから、国と国との争いのような大規模な争いとはなりません。ですから、犠牲は必要最小限度で済みます。相手を根絶やしにするような争いはしません。

ですが、人間のやる戦争は国と国との争いであり、武器を使いますから、その被害は大きくなります。第2次世界大戦では、6,000万人とも8,000万人とも言われる人が殺されました。人間の方が動物より遙かに危険です。

動物界で繰り広げられている食欲の衝突には、自然界が一定の限界線を引いてくれており、一定の線を超えないようにつくられています。それが自然の摂理です。万物を支配する法則です。

しかし、「万物の霊長」などと驕っている人間は自然の引いた線を超え、自然界そのものを破壊しようとさえしています。自然の摂理を無視しようとし、他の動物より自然科学的知識があるから、このような神をも恐れぬ行動に及ぶのです。

自然科学の進歩は危険な側面を持ちます。スウェーデンの化学者・発明家のアルフレッド・ノーベル（1833-1896）がダイナマイトを発明したのはその一例です。その最たるものが原爆です。第2次世界大戦では、広島・長崎でそれが





使われました。

この先、食欲、物欲の衝突によって戦争が起こり、原爆が使われたら、人類滅亡、地球壊滅の危険さえあるのです。

人間界の食欲、物欲の衝突は、人間に自然科学的知恵があるだけに恐ろしい結果をもたらします。自然科学的知恵は、人間の心を見殺しにして進行してはならないのです。

戦争が繰り返されるようなことになったら、人間は「万物の霊長」から「万物の破壊者」となるのです。その責任は人間だけに止まらず、全生物に及ぶのです。

物理学者のアルベルト・アインシュタイン（1879-1955）は、原爆開発にかかわったことを深く悔いていたとのこと。自然科学的知恵は、悪用されたら大変な結果が生まれてしまいます。自然科学の進歩の前には、欲望をコントロールする知恵が置かれていなければなりません。

自然科学の進歩に、人間の心の進歩が追いついていないのです。金になる自然科学には力を入れるが、金にならない心の問題は置き去りにされてきた結果です。ここも、結局「欲望」の問題です。「欲望のピラミッド図」の底辺部分の欲望をどう満たすかに重点が置かれ、頂上部分の欲望については、政治家は無関心、無知識だったからです。

安倍政権は、「日米同盟を強化し、軍事的な連携を深めることによって抑止力を高め、国民の命と平和な生活を守る」などと言っていますが、「戦力による抑止力」よりも、戦争を引き起こす根源である「欲望の抑止」を考えてほしいのです。

「経済力向上」、「戦力増強」、「富国強兵<sup>ふこくきょうへい</sup>」をスローガンに掲げ、欲望の衝突を激化させることより、欲望の衝突を避ける工夫をしてほしいのです。「欲望のコントロール」、「少欲知足」を実現してほしいのです。「サミット」とは「頂上」という意味だそうですが、サミットではそういう問題こそ議論してほしいのです。

国と国とがその食欲、物欲を衝突させ、譲り合うことをしなければ、第1次、第2次世界大戦のような大惨事に至ることがあるのです。歴史がそれをはっき





りと示してきています。もう繰り返してはならないのです。

これまで地球上に発生した数々の戦争は、「宗教戦争」のように主義・主張を譲らないという、より人間的な欲望が原因となっているケースもあります。ですが、多くは食糧や燃料の争奪戦そうだつせんであり、「エネルギーの奪い合い」です。主義・主張も、自国の食欲、物欲を満たすための詭弁きべんに過ぎないことも多いのです。

国と国との間でも、「欲望のピラミッド図」の下層に位置する食欲、物欲は衝突することが多く、国と国との衝突の規模は大きくなります。その結果、欲望の衝突は世界大戦まで引き起こすのです。

宗教戦争のような主義・主張が原因となって生じる戦争は、長期化する傾向があるように思われます。食欲、物欲と主義・主張が渾然こんぜんとなって戦争に至るケースも多く見られます。いずれも欲望と欲望の衝突です。この知見を世界の政治家には持ち続けてほしいのです。

安全保障問題が議論されるようになってから、『新・憲法の心』の書き出しとして、『戦争の放棄』を第1巻から第18巻まで発刊しました。

安全保障問題を論じることも必要ですが、その前に「欲望の衝突」を掘り下げることが不可欠だと確信しています。戦争の原因である「欲望の衝突」、つまりは「欲望」を掘り下げることが急務です。『戦争の放棄』を書きながら『長生きを楽しむコツ』を書いているのは、そんな思いもあるからです。

食欲に限らず、欲望は多くの場面で衝突することがあります。個人には、一方では自分だけが知っている他人の秘密を暴露ばくろしたい欲望があります。他方では、自分の秘密を知られたくない欲望があります。人間には「自分が言いたい」という欲望がありますが、「他人に言われたくない」という欲望もあります。

これは「表現の自由とプライバシーの衝突」の場面です。その他にも、人と人との間では、多くの場面において、ある人の欲望と他の人の欲望とが衝突する場面が出てきます。これは憲法問題、法律問題として議論されることになります。

人と人との間には、絶えず欲望と欲望の衝突が生まれます。社会生活を営んでいけば、あらゆる局面において欲望の衝突は発生します。

科学や社会が進歩すれば、これまで生じなかった欲望の衝突が生まれます。



かつては考えられなかった宇宙や海底に対する欲望が生まれてきます。その欲望の衝突が生まれます。最近では、国家間に宇宙や海底の利権を巡<sup>めぐ</sup>って争いが発生しているようです。

個人と個人、国と国との欲望の衝突をどうコントロールすべきかについては、叡<sup>えいち</sup>智を結集しなければならないのです。法や道徳や宗教など、あらゆる手段によって個人間の欲望の調整を図らなければならないのです。国と国との間では外交が大事なこととなってきます。個人と個人、国と国との欲望の調整を図るためには、その根底にある「欲望」を見極めることが大事となります。

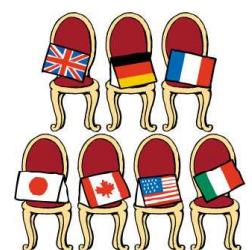
個人と個人間、団体と団体間の欲望の衝突は、人間が世に生まれた時点から発生していた問題だと思えます。人間は常に悩み考えてきたはずですが、第1次、第2次世界大戦などを見ていると、自然科学は進歩しましたが、心の問題は進歩がないような気がします。「核の抑止力」などと現象面だけに着目せず、人間の思考、行動の根源にある「欲望」に着目しなければならないのです。自然科学以上に、心の問題を深めなければならないと確信します。

どうやったら欲望を満たすことができるか、どうやったら自分達の仲間の贅<sup>ぜいたく</sup>沢を満足させられるかを各国のトップが集<sup>つど</sup>って協議するよりも、どうやったら欲望をコントロールできるかを検討すべきです。それこそ、サミットで議論されるべきです。

これは、国と国、集団と集団との間に限ったことではなく、個人と個人の間においても、衝突する欲望をどのようにしてコントロールすべきかが議論されるべきです。1人1人が真剣に考えるべきことです。

人と人との間に限らず、自分自身の中にも欲望の衝突があります。「やりたい欲望」と「やりたくない欲望」、「やってやりたい欲望」と「やってやりたくない欲望」、その他、自分の中にも切りがないほど欲望は衝突しています。

その欲望を上手にコントロールする知恵が、「長生きを楽しむコツ」であり、「人生は楽しみ合うのみ」という哲学を実践するために不可欠となるのです。それが、『戦争の放棄』と並行して『長生きを楽しむコツ』を書いている理由です。





## 《 新刊のご案内 》 年寄りのための童話

### 『長生きを楽しむコツ その八 第13・14話』

新刊『長生きを楽しむコツ その八』が10月30日に発刊の運びとなりました。第13話は「違いを楽しむ (その1)」、第14話は「違いを楽しむ (その2)」です。

その冒頭で、司法研修所時代の同級生・<sup>みわいさお</sup>美和勇夫弁護士（岐阜県弁護士会所属）の「みそとくそ」を紹介しています。彼の文章は、<sup>けいみょうしゃだつ</sup>軽妙洒脱で面白いのです。以下にその部分を転載します。

私の文章はその後に続いていますので、是非『長生きを楽しむコツ その八』をお読みいただきたく、お願い申し上げます。念のため、「<sup>けいみょうしゃだつ</sup>購買申込書」を同封しますので、宜しければご利用の上、お申し込み戴ければ幸甚です。

\*\*\*\*\*

#### ○ 「みそとくそ」

「みそもくそも一緒にしてもらっては困る」とはよく言われることである。「そ」の字がついてよく似てはいるが実体は違うということで「月とスッポン」のたとえの如し<sup>ごと</sup>である。

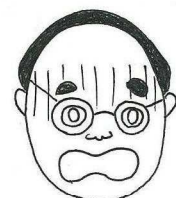
えらい違いだということ表現するのになぜ「月と糞」<sup>くそ</sup>といわないかという<sup>こえ</sup>と両者には一見よく似た共通点がないからである。

「月とスッポン」とは丸い形がよく似てはいるけれども実体にはどえらいへだたりがあるということで、たとえにあげられるわけだ。

「みそ」も「くそ」も同様、両者は一見同じ形状をしており、それに「そ」の字まで一緒にゴロあわせがよい。それでよくひきあいに出されるわけだ。

で、この「みそ」も「くそ」もこれを一緒にして「肥つぼ」<sup>こえ</sup>に入れておく分には別に不都合はない。

「みそ」さえ承知ならそれでよいことであるが、これを「くそ」の方が「みそつぼ」に入れてくれといい出すとそうはまいらない。



なんとなれば肥つぼの中の両者は、これを一緒にまいてしまえば肥料にはなろう。ところが「みそつぼ」の両者をみそ汁に使うわけにはまいらぬのである。

いかなる人的関係、組織にも「みそ」に該当する人間もいれば「くそ」に該当する人間もいる。そして往々にして、都合の悪いことに、「くそ」に近ければ近い人物ほど自分こそ限りなく「みそ」に近い者だと信じてやまないことが多い。

社会的身分においても知的思考性の<sup>けだか</sup>気高さにおいても<sup>おの</sup>己れこそがすぐれたる人物だと思いこんでおる人が世の中には多いものである。

このことは不幸にしてまたわが業界においても散見される場所である。

「年長者」からもまたあらゆる階層の「依頼者」といわれる人からも先生よばわりされていけば、おのずから知らぬうちに「みそ」が変じて「くそ」になり変わることもむべなるかなである。

何の因果か、同じ職場において、同僚あるいは上役にこれをかかえたる人々は全く同情に余りあるものである。

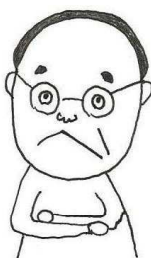
「さるべきにやありけむ」……これも前世からの<sup>いんねん</sup>因縁というものであろうか。ひたすら、あるいはより広い<sup>どりょう</sup>度量で、一緒に肥つぼに入ってやっているんだと思うよりいたしかたのないことである。

それを一見して<sup>せじん</sup>世人は「何だ、くそか」と言うではあろう。

「じょうだんじゃないぜ、みそもくそも一緒にされてたまるか、俺はみそだけど奴はくそだ。」

わかる、わかる、あんたのその気持。しかし柴又の寅さんじゃあないけれども、「それをいっちゃあおしめえよ」…。わけのわかったようなわからないような、例によってある日、ある時の私の<sup>こうしゃく</sup>講 釋である。

「くそとみそとを肥つぼに入れておく分にはかまわないけれども、みそとくそとをみそつぼに入れておくわけにはまいらない」。これを何とか私の語録として残しておきたい。



<sup>みわいさお</sup>  
(美和勇夫弁護士著『弁護士日記』より転載)